

# 「家がいいね」 第17号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2005.10.3

天高く、読書の秋です。

七福神の「幸福」談義

『昔話にはウラがある』

ひろさちや（新潮社）から、  
かいつまんで引用します。

**寿老人** 本当の幸福とは老いることなんです。でも今の日本

本人は老いたくないと思ってるから、せつかくの長寿もマイナス価値で不幸なんですな。

**大黒天** 古代の中国もインドも、老人とは、役立たずで働かんでもええで：とお墨付きをもちて、若い者がどたばたするのを意地悪く、知恵のあるその目で日々傍観する楽しみがあったわけや。

**福祿寿** どうも日本人は、老いるのをポンコツになると錯覚してますな。さらに死ぬのを殺されることだと錯覚して死にたくないと言い、病むことを故障だと錯覚して、すぐ修繕を考えます。ごく自然な「老・病・死」が分からないから不幸です。

**弁財天** それとモノの豊かな日本人は、自分の持ち物をマイナスで見てるから不幸なんやわ。ほら、あと百万で1千万なら、あと百万欲しいと熱望の人の財産は「マイナス百万円」となるわけよ。

**毘沙門天** 「この次は百点よ」と子供の尻を叩く母親もマイナス思考か。頑張るほど、豊かになるほどマイナスとは、どうしようもおまへんな。

**吉祥天** とかく日本人には、お釈迦さんの教え「欲を少なくして足るを知る心を持ちなさい」を思い出してもらわないと、あきませんやろね。

「幸運な医者」への道すじ

松田道雄さんの遺作『幸運な医者』（岩波書店）を読みなおした。病院間の競争に追われ、検査や患者を増やすことを当然とする世相は容易に変わらない。一人一人の患者さんへの関わりは、当然短く浅くなる。良識のある医者なら、1日50人から百人の患者を見なければならぬ仕組みを続けるものだろうか、と言われる。まともな診療は9時から1時で15人、との松田さんのスタイル。



この3年の自分の一日の患者数だけを見ると、何とかその規模でとどまっています。高価な設備や検査器具をそろえなかつたため、職員給与を払っても赤字はありません。ただ勤務医時代のレベルの給与を、今の自分には払えませんが、まともな診療をめざす事は、自分の寿命を延ばすよう何事にも替えがたいものだと思います。

往診前 ちよつぱり幸せ



## 最期に言われた言葉

時間がたつてもありありと想い出される情景があります。若いお母さんでした。癌の勢いが心臓の周囲まで迫る中で必死に代替医療と在宅療養をしていました。全ての事情を克明に知っておられました。残りの時間を口にされませんでした。発症の後に授かった一人娘さんに、「自分の気持ち伝えて欲しいと、診察の度に気を揉みました。つらい日常だけに、「いま伝えなければ、もう機会は残っていないかも」と言えず呑み込むばかり。目の前で、急変が来ました。「死んだらあかん、頑張って」の皆の悲痛な叫びの中、娘さんが「お母さん、今までありがとう。私のことを忘れないで」と呼びかけ、その場の空気が変わりました。皆が、口々に「ありがとう、今までよくやったね」とお別れの気持ちを出されました。しばらくは、後ろから私も看護師も涙の中で、瞳が永遠に閉じられるのを見守りました。「1時間、親子3人みずいらずにさせて」と言う時間が、その直前にあったと、後になってお聞きしました。



自宅での人生を  
最期まで支援します

〒516-0805  
三重県度会郡御園村高向 927  
電話 0596-20-8104  
ファクス 0596-20-8105  
mail [homecare@kr.tcp-ip.or.jp](mailto:homecare@kr.tcp-ip.or.jp)  
HP <http://tcp-ip.or.jp/~takuro>